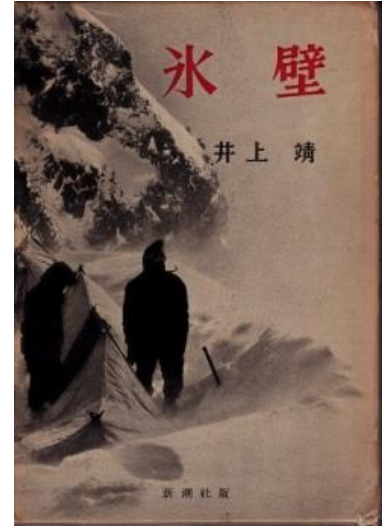


井上 靖著『氷壁』

「D沢ニ、三時半ニ入ル。落石頻々ガス深シ。四時三十五分グライ、ツルム付近ニテ大落石ニ遭ッテ負傷。涸沢岳カラ派生セル無名尾根ノ露岩ノ陰ニ退避、失神。意識ヲ取り戻ス、七時ナリ。大腿部出血多量。下半身痺レテ、苦痛ナシ。ガス相變ラズ深シ。意識簡潔的ニモウロウトス。

コノ遭難ノ原因ハ明ラカナリ。——ガス深キヲ敢エテ進ミシコト。落石頻々、異常ナルヲ顧ミザリシコト。一言ニテ言エバ無謀ノ一語ニツク。高名ナ登山家デ避ケ得ラレル遭難ニオイテ一命ヲ棄テシモノコレマデニ多シ。自分自身マタソノ轍ヲ踏ムコトニナツタ。

ガス全クナク、月光コウコウ。二時十五分ナリ。苦痛全クナク、寒気ヲ感ゼズ。静カナリ。限りナク静カナリ。」



前年の冬、前穂高岳東壁をペアで登攀中、相棒をザイル破断事故で失った主人公が諸々の葛藤を経て、独りで北穂高岳滝谷に入り、友と同じ運命を辿ることになる最終シーンの描写である。

棟方志功の扉、背表紙の版画と文字、風見武秀の箱装丁写真でこの本が出版されたのが昭和32年、映画化もされて有名になった。昭和30年1月、前穂高岳・東壁で実際に起こったナイロンザイル破断事故に想を得て小説化されたものである。

この事故は、それ迄の麻ザイルに替わって、ナイロンザイルが始めて世に出た時の事故で、ナイロンザイルが本当に岩角で破断したのか？、パートナーがザイルを切断したのではないのか？などの憶測を呼び、山岳界を挙げての論争に発展した。遭難したパーティーが所属していた山岳会とその山岳会が属していた三重県山岳連盟はナイロンザイルは岩角に弱いので破断したという主張を行い、一方ザイルのメーカーは公開実験を行って、ザイルに問題は無かったと反論した。この論争はその後20年間も続き、ひいては日本山岳会をも巻き込んだの対立となった。（日本山岳会発行『山日記』に掲載された「ナイロンザイルは90度の岩角で13メートルまでは切れない」とする記事、及び日本山岳会がその記事を書いた阪大名誉教授を日本山岳会の名誉会員に決定したことなどに対する三重県山岳連盟及び山岳界からの反発。その結果、重宝だった『山日記』発行の廃止など）。この間の事情は三重県山岳連盟発行『岳連50年史』に詳しい。精緻な実験を繰り返し、「破断」を主張した当該山岳会会長の石岡繁雄氏（鈴鹿高専教授）の努力には頭が下がる思いがするが、ここではこれ以上は触れない※。

私がこの小説を読んだのは高校生の時だった。学校の図書室でたまたま見かけた本であった。映画も田舎の薄暗いジメジメした映画館で観た記憶がある。草深い山奥の田舎では映画などというものは滅多に見る機会もなかったから、それだけ新鮮であったのかも知れない。このことが、私をして登山という世界に足を踏み入れさせる引き金になった。この本に触発されて、図書室にあった「登山全書」などを借りてきて、家の石垣に藁縄などを張って岩登りのマネゴトなどをしたのを覚えている。

今読み返してみると、山でのことはともかくとして、主人公と、遭難死した相棒が一人の人妻を巡って起こす確執や若い女性との心の葛藤など、恋愛沙汰には些かウンザリして途中で放り出してしまうが、これも還暦過ぎた年寄りになったせいであろう。多感な少年であった当時は新鮮な夢を掻き立てられたのであろうし、未だ恋愛がそれほど日常化されていない世の中であって、私だけでなく当時の日本の若者を魅了したことは間違いなからう。

長じて、この小説の舞台になった前穂高岳・奥又白の池やA沢を登ってみた。単独行だったことも手伝って小説の世界が彷彿としてきた。何年か前に、近所の図書館の古い映画の鑑賞会でこの映画を観た

ことがあった。山のあれこれや若い時の思い出が沸いてきて、涙が出そうになってきた。しかし、これは我が山の神がのたまう「歳をとって、単に涙腺のゴムが緩んできただけのこと」かも知れない。嗚呼。

新潮社 1957 年刊。

(2005 年 10 月 記)

【※追記】 ナイロンザイル破断事件の経緯については、最近刊行された下記の書物に詳しい。興味がある方はお読み下さい。

『石岡繁雄が語る氷壁・ナイロンザイル事件の真相』 石岡繁雄／相田武男著 アルム書房 2007 年刊

[「山書の小溪」目次に戻る](#)